

漢語上古音の-r-介音(1)

—二重子音について—

吉池孝一 中村雅之

Jaxontov (1960)の説

吉池：「烏弋山離とアレクサンドリア(1)～(4)」で漢代の長安音と洛陽音について話し合いました。今回以降は、新派の研究者による“上古音”が、どのように設定されたか、また漢代音とどのような関わりをもつのか、ということについて確認をすることで、上古音に一步踏み込んでみたいとおもうのですが。

中村：歌部の上古音を*-ai(-aj)とする、*-r-介音を設ける、来母を*r-とする、喻母四等を*-l-とするなどがありますが、二等韻の*-r-介音からはじめましょう。

吉池：*-r-介音について Baxter(1992:262)¹にはつぎのようにあります。

The essentials of the theory of division-II syllables outlined above, which we may call the *-r-hypothesis, originate with Jaxontov's proposal to reconstruct *-l- in division-II (1960a). This proposal was adopted by Pulleyblank, who reports having independently arrived at the same idea (1962:110). Later Pulleyblank substituted *-r- for his earlier *-l-, as I do. Li Fang-kuei also reconstructed *-r- in division-II syllables. Jaxontov's original proposal was based on the fact that (1) the contrast between division-II vowels and other vowels does not appear after Middle Chinese initial *l-* (apart from a few irregular forms), and (2) many division-II words appear in *xiéshēng* series with words in Middle Chinese initial *l-*. (Recall that in my system MC initial *l-* reflects OC *C-r-.) Reconstructing *-r- in division-II finals provides a unified explanation of these phenomena. It is also significant, of course, that the Middle Chinese retroflex initials *TSr-* and *Tr-*, whose retroflexion I attribute to medial *-r-, are regularly placed in division-II of the rhyme tables, while plain *TS-* and *T-* are not. (*Tr-* occurs in division-III as well.)

中村：Jaxontov氏の1960年の論文が嚆矢のようです。たしか、漢語訳がありましたね。

吉池：『漢語史論集』²(1986:42-52)のなかに「上古漢語的複輔音声母」としてあります。何度か読み返してみたのですが、なかなか呑み込めないというのが正直な感想です。なさないことなのですが論文を読む前に、どういうことなのだ、という結論の要約を聞いて

¹ Baxter, W. H. (1992) *A Handbook of old Chinese Phonology*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

² 謝・葉・雅洪托夫著 唐作藩 胡双宝選編(1986)『漢語史論集』北京：北京大学出版社。

おかないと理解が困難です。

中村：Baxter(1992:262)の(1)と(2)は要約といえば要約なのですが、これもはっきりしませんね。要はこういうことでしょう。

中古音の韻母は、韻図の配置によって 1 等韻から 4 等韻に分けることができるが、そのうち 1 等韻と 2 等韻の違いは主母音の違いとして理解される。ところが、声母との結びつきに注目すると、どういうわけか、一部の例外を除いて 2 等韻に来母字(-l-)がない。なぜ 2 等韻に l-がないのか。それは、上古音の時期には 1 等と 2 等の違いがなく同じ主母音をもっていたが、-l-の有無に違いがあり、上古音の声母 C (1 以外の子音を C で表記する) +母音が中古音の 1 等韻になり、上古音の二重子音 Cl+母音の方が中古音の 2 等韻になった。つまり、後者の-l- (これを漢語音韻学の用語で介音と称してもよい) が脱落した結果、母音が変化して中古音の 2 等韻になった。

吉池：中古の 2 等韻はすべて、上古の Cl-にさかのぼる。上古の Cl-の-l-が取れて中古 2 等韻の C-となったという説明はわかりました。しかし、なぜ 2 等韻に l- (来母字) がないのかの説明にはなりませんね。

中村：Jaxontov 氏によると、上古の声母に ll-というという子音連続がなかったため、-l-が取れた 2 等韻の l-はないとします。

這樣來解釋二等字的起源時，爲什麼聲母爲 l-的字不可能屬於二等就很清楚了：因爲在聲母 l-之後不可能還有介音 l。 (45 頁)

吉池：なるほど、同質の音による子音連続の ll-が許されなかったと考えたわけですね。これまでの要約に沿って Jaxontov (1960)を読み直してみるとこういうことでしょうか。

① 中古音の 2 等韻に l-声母字がない (一部の例外を除く³)

- 1 等 C- , l-
- 2 等 C- , 無
- 3 等 Cj- , lj-
- 4 等 Ci- , li-

中村：Jaxontov 氏は、中古の 2 等韻に声母 l-を持つ音節がない (とあってよいほどの) 実情に気づいたわけですね。そして、その理由を漢字の諧声系列の偏った分布によって説明した。

³ Jaxontov(1960;1986:43)によれば、例外は冷、犖、醜の 3 字。これについては後述。

吉池：諧声系列とは、濫と監、隆と降など声符を同じくする漢字のグループのことで、諧声系列ができた時代に、同じ系列の文字は類似した発音であったに違いないと想定するものですね。Jaxontov 氏はこの想定を認めて、そのうえで、諧声系列のなかに、次の②のような偏りをみつけた。諧声系列をなす漢字の例は Jaxontov (1960;1986)によります。

②2 等の C-は 1,3,4 等の l-(l-, li-, li-) と諧声系列をなすが、1 等の C-は 1,3,4 等の l-(l-, li-, li-) と諧声系列をなさない。

- 1 等 C- , l- 監 kam(2 等)と濫 lam(1 等)など
- 2 等 C- , 無
- 3 等 C_i- , li- 降 kǎng(2 等)と隆 liǒng(3 等)など
- 4 等 C_i- , li- 柬 kan(2 等)と練 lien(4 等)など

中村：2 等の C-と 1,3,4 等の l-とが諧声系列をなします。これは 2 等の C-が、上古では Cl-のような二重子音であり、Cl-の-l-と 1,3,4 等の l-が類似音として諧声系列をなしたためです。他方、1 等の C-には上古にあって-l-の成分がなかったため l-とは諧声系列をなさないというわけです⁴。

これは 2 等韻を中心として説明した部分ですが、Jaxontov (1960)は 3,4 等の-l-についても言及していますね。

吉池：はい。

③3,4 等の C_i- , Ci-と 3,4 等の li-, li-と諧声系列をなすものがある。

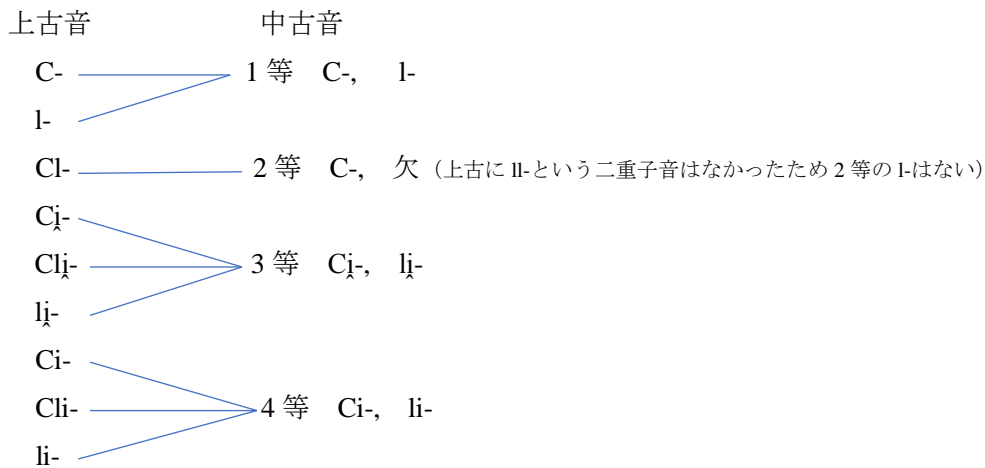
- 1 等 C- , l-
- 2 等 C- , 欠
- 3 等 C_i- , li- 文 mjuən(3 等)と吝 liǎn(3 等)、兼 kiem(4 等)と廉 liǎm(3 等)など
- 4 等 C_i- , li- 兼 kiem(4 等)と謙 liem(4 等)など

*l-で始まる 4 等の例がなかったため、対談者が謙 liem(4 等)を追加した。

中村：li-, li-と諧声系列をなす C_i- , Ci-は上古音で Cl_i- , Cli-であった。Cl_i- , Cli-の場合、-l-が脱落して C_i- , Ci-となっても主母音の変化はなかったと Jaxontov 氏は想定するようです。

吉池：そうすると、上古音の-l-が脱落した結果、中古音との対応は次のようになりますね。

⁴ 1 等の C-と l-とが諧声系列をなす例外も挙げられている。例えば、各 kak (1 等) と洛 lak (1 等)。この「各」は本来『来る』という意味の 2 等字 ([klak]) だったが、『おのおの』という意味をあらわす 1 等韻の語 ([kak]) に借用され、そのため『来る』の方は 2 等字「格」で記されることになったという。「各」が『おのおの』という 1 等韻の語 ([kak]) に借用されたのは-l-が脱落してからのことであろう。



中村：Jaxontov (1960)は中古の2等韻にl-が現れないと主張し、このことからl-と諧声系列をなす漢字を分析し、上古音で2等字がCl-のような二重子音をもっていたと説明するようです。Jaxontov (1960)が述べようとしたことは理解できるのですが、利用した資料が適当なものであるかどうか、Jaxontov 氏の議論を再検証することができるかどうか確認をしたいですね。

諧声系列の依拠資料

吉池：Jaxontov (1960;1986:43)は、分析に利用した漢字資料は董同龢(1944)『上古音韻表稿』の中の漢字であると言っているの、依拠した資料ははっきりしています。

二等字幾乎任何時候都不以輔音l起首。从董同龢的音韻表中可以看出，在『説文』中只能找到三個聲母爲l起首的二等字，而其中又只有一個是常用字：冷 $lɔŋ^2$ （其余兩個是：皚 $lâk$ ；醜 $ngjäm^3$, $lɔm^2$ ）。【□¹は平声、□²は上声、□³は去声、-p,-t,-k は入声。対談者注記】

中村：その『上古音韻表稿』の漢字は何に拠っているのでしょうか。

吉池：『上古音韻表稿』の「表例」によると⁵、表に収めた漢字資料は、後漢『説文解字』（紀元後100年成書）の9千余字と、『説文解字』に収められていない先秦古籍中の文字とのことです。甲骨文字は時代差があるため収めず、青銅器の銘文は解釈が確定していないため収めないとのことです。

- (1) 表収録的字是以説文的九千多字爲基礎，再加上先秦古籍所見而説文未收的字。希望能把先秦所有的字網羅在內，以爲音韻研究的根據。
- (2) 我完全没有加入龜甲刻辭與鐘鼎銘文是有原因的。龜甲刻辭跟我們研究的古音系統有時代先後之分，自極明顯。鐘鼎銘文固大部是同時代的材料，但是我覺得有許多字的辨認現在還是問題；又在確實能認的字中，超出小篆系統的也寥寥無幾，要了他們也

⁵ 董同龢(1944)『上古音韻表稿』台湾：中央研究院歷史語言研究所。1975年の第三版による。

沒有什麼用處。(119 頁)

中村：『説文解字』中の文字は全て採用するわけですか。

吉池：“正篆”と“重文（古文、籀文、或作）”があるばあい原則として“正篆”を採用するのですが、幾つか基準を設けて取捨選択をするようです。

(4) 説文除“正篆”之外還有所謂“古文”，“籀文”，“或作”。他們大都是字形上的歧異，尠有音韻的意味。所以在原則上我只取“正篆”而捨“重文”，但以下列情形爲例外：(a)～(e)……。(119 頁)

中村：『説文解字』中の“正篆”に対応する楷書体の漢字を中心にして、先秦古籍中の楷書体漢字を収めたものが『上古音韻表稿』ということですね。そうすると時代としては『説文解字』の成書年（100 年）までに作られた漢字を収めたということになりますか。

吉池：著者の董同龢は周秦の漢字と考えているようです。前漢の初めには篆文を知る人は少なくなっていたため、たとえ周秦以降の篆文が紛れ込んでいたとしてもごく少数であり、周秦の音韻研究に影響はしないとします。

據載籍，西漢初能識篆文的人已經很少了。那麼出於周秦後的篆文必更有限。縱有幾個雜在説文之內，也不足爲害。(119 頁)

中村：先ほど引用した Jaxontov (1960;1986:43)の説明をみると、董同龢がいう周秦の漢字資料（説文と先秦古籍）により、2 等韻字の中に来母 (l-) 字は極少数で 3 字のみだとしたわけですね。冷 $lɔŋ^2$ と犖 $lɛk$ と醃 $ŋjäm^3$, $lɔm^2$ の 3 字を挙げますが、醃には 2 音あり、いうまでもなく問題となるのは醃 $lɔm^2$ のほうです。Jaxontov 氏はこの冷 $lɔŋ^2$ と犖 $lɛk$ と醃 $lɔm^2$ の 3 字は『説文解字』から採ったものと明言しています。

吉池：冷 $lɔŋ^2$ と犖 $lɛk$ と醃 $ŋjäm^3$ と醃 $lɔm^2$ に相当する漢字と音は、すべて『上古音韻表稿』の表のなかにあります。しかし『説文解字』を開いてみると状況はやや異なるようです。『説文解字』には音の情報として宋代の学者の反切が増補されており、冷 $lɔŋ^2$ と犖 $lɛk$ と醃 $ŋjäm^3$ に相当する漢字と反切はあるのですが、 $lɔm^2$ に音相当する反切はありません。

醃 酢漿也。从酉僉聲。臣鉉等曰、今俗作醃、非是。魚窆切。(卷十四西部)

魚窆切は $ŋjäm^3$ に相当する反切であり、ここから $lɔm^2$ という音を導き出すのは困難ではないでしょうか。そうすると、董同龢氏は、醃 $ŋjäm^3$ を『説文解字』から採録し、醃 $lɔm^2$ のほうは先秦古籍から採録したと見た方がいいのでしょうか。ところが、Jaxontov 氏はすべて『説文解字』から採録したと誤解したわけです。

中村：『上古音韻表稿』に、先秦古籍から採ったものはどれで、どの先秦古籍から採ったのか、という情報があったならば Jaxontov 氏のような誤解は生じなかったのでしょうか、残念ながらそのような情報はありません。諧声系列を扱う場合、資料の質の問題（何時のものか、どの地域のものか）はいつも気になるところです。

共時的諧声資料

吉池：その点について、古屋昭弘(2010)において時代別・地域別の諧声資料の作成が提唱されています⁶。このような資料が整ったならば、上古音研究は時間の流れと地域の異なりを反映したものになるのでしょうか。

今後は、たとえば西周金文、春秋金文、戦国金文、戦国簡牘、前漢帛書・・・というように、そしてできれば春秋齊の金文、戦国中山国の金文・・・というように、時代と地域を限定した共時的諧声資料が多く作成されることによって、確実な声符に基づいた、より精緻な上古音研究の展開が可能になるのではないかと期待される。(29 頁)

中村：Jaxontov 氏が使用した資料は、董同龢がいう周秦の漢字資料（説文と先秦古籍）であり、一千年弱という長い時間に渡り、地域も特定されないもので、「共時的諧声資料」からは程遠いものですが、等位にまで及ぶ細かな点に一定の傾向を示すとすれば、これは驚くべきことです。

吉池：そうですね。周秦の漢字（説文と先秦古籍）とされる資料を、中古音の枠組みによって4つの等に分類した場合、①2等韻に来母(ㄌ)字が極めて少なく(3字のみ。おそらく後代に2等韻になった)、②来母(ㄌ)は2等韻の諸子音と諧声系列をなすが、1等韻の諸子音とは諧声系列をなさないわけです(後代のものとされる例外はある)。

そうするとどうでしょう、董同龢氏は周秦の漢字と大きくりに表現しますが、この“周秦の漢字”は長い時間に渡る地域も特定されないようなものではなく、一定の質(時間と地域が特定された)を保ったものかもしれないという気がします。『説文解字』の篆書は一定の質を保ったものであるということです。もっとも、問題は董同龢氏が補充した先秦古籍の漢字です。どの漢字が補充されたものかについては、一つ一つ『説文解字』と見比べればわかることですが、今我々にその時間はありません。残念ながら、先秦古籍の漢字がどこから採録されたものか、それが上記①と②にどのような影響を与えているか明らかにすることができないというのが実情です。

中村：先秦古籍の漢字を特定する作業の後に、それこそ、出土資料による時代別・地域別の諧声資料(「共時的諧声資料」との比較研究が必要ということなのでしょう。それはそれとして、周秦の漢字(説文と先秦古籍)とされる資料に①と②がみられるのは確かなの

⁶ 古屋昭弘(2010)「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」『中国語学』257:4-33.

でしょうか。

吉池：Jaxontov (1960;1986)の議論が正しいとしたら、①については、漢字を中古音の枠組みで1等から4等に分類した場合、2等韻の来母 (l-) 字は、1,3,4等韻に比べて理由を考えなければならぬほど少ない。そして2等韻に来母 (l-) 字があるとしたら、すべて Cl-という二重子音が解消した後にできたものということになります。同様に②については、来母 (l-) と1等韻諸子音とで諧声系列をなすものは、2,3,4等韻に比べて理由を考えなければならぬほど少ない。そして1等韻諸子音と諧声系列が認められるものがあるとしたら、それは Cl-という二重子音が解消した後にできたものということになります。それを、本来ならば、われわれなりに検証しなければならないのですが、多くの時間が必要となります。そこでどうでしょう、今回は上古音の議論の進展を中心に確認するということで留めておき、大掛かりな検証は個別にすすめるということではいかがでしょうか。

①と②の解釈

中村：Jaxontov (1960;1986)の議論が正しいとして、①と②によって上古漢語の声母に Cl-という二重子音を想定するわけですが、それ以外の想定は可能でしょうか。

吉池：尾崎雄二郎氏の「上古漢語」の複聲母について⁷（1967年）は上古音に二重子音は認めません。造字において、声符は僅かな音の類似によって採用されたという前提にたちます⁸。そのうえで、濫 lam と監 kam などの諧声系列については来母の音価が軟口蓋で調音する [l-]であったため、同じく軟口蓋で調音する [k-]などと声符を同じくしただけであり、kl-のような二重子音があったためではないとします。

中村：しかしそうすると、たとえば1等韻の濫 Lam は、2等韻の監 kam よりも、むしろ1等韻の甘敢 kam などと声符をともしても良さそうところ、そのようにはなっていません。

吉池：さきに挙げた②来母 (l-) と2等韻の諸子音と諧声系列をなすが、1等韻の諸子音とは諧声系列をなさないという諧声符の分布が説明できないため、尾崎氏の説は成り立たないということですね。

ところで、王力氏も諧声系列を声母に持ち込むことには懐疑的ですね。また現代漢語方言に二重声母の痕跡はないので上古音においても認めないという立場のようです⁹。しかし

⁷ 尾崎雄二郎(1980)『中國語音韻史の研究』東京：創文社所収による。

⁸ 「つまりわれわれの問題は、こんな工合にまとめて言うことができるであろう。蒼韻の造字にあたって諧聲字の聲符は、聲についても韻についても、ごく僅かの似寄りをもつという程度の条件でも、聲符として採用されることがあり得た、というのである。」(30-31頁)

⁹ 王力(1985)『漢語語音史』(北京：中国社会科学出版社)に次のようにある。

王氏は、2等韻に-e-という介音を設定しており、2等韻に-l-介音を設定する Jaxontov 氏と通底するところがあるようにみえます。

中村：2等韻に-e-という介音を設定すれば、1,2等韻に相当する上古音の主母音を一つにすることができ、母音の体系が簡略となります。この点は両者に共通するところでしょう。諧声系列を声母に持ち込まないという王力氏の方針は、声符の共有に原則を見出すことが難しいという印象によるものようですが、Jaxontov 氏の①と②は、王力氏の説では説明ができません。

吉池：平山久雄氏も新派が2等韻に-r-介音を想定する説に否定的でしたね。

中村：はい。平山氏は2等韻の上古音に新派のような*rの代わりに、口蓋化要素*jを想定する案を提示しています¹⁰。これは主に中古音の舌上音（知母・徹母・澄母）に反り舌音ではなく舌面音を想定することを前提とした解釈です。

吉池：来母との関係はどう考えていますか。

中村：Jaxontov(1960)の基礎の上に Baxter が2等韻に*r介音を想定した説を紹介しています。そして*rを口蓋化要素*jに替えるだけでは来母と2等韻の関係を説明できないため、なお検討が必要としながらも、一つの解決策として、例えば「監」を*kljamとして、後にjの前のlが消失するという案を示しています。

吉池：つまり二重子音を認めるということですね。

中村：そうなのですが、この案にはやや場当たりの印象を受けます。何よりも新派の*r介音の代わりに*jを提案するという論文の趣旨に合っていません。それに2等韻全体に*-lj-を想定するのか、それとも来母と諧声系列をなすものだけにとどめるのかも曖昧です。ただ、Jaxontov(1960)の示した事実から二重子音を想定せざるを得ないと感じていることは間違いないようです。

「上古漢語有没有複輔音？這是尚未解決的問題。從諧聲系統看，似乎有複輔音，但是，現代漢語爲什麼没有複輔音的痕跡。」(23頁)及び「高本漢擬測的複輔音聲母，有下列十九種：……。其實依照高本漢的原則去發現上古複輔音聲母，遠遠不止十九種。……等，不勝枚舉。上古的聲母系統，能這樣雜亂無章嗎？所以我不能接受高本漢上古複輔音的擬測。」(24-25頁)

¹⁰ 平山久雄(1994)「用声母腭化因素*j代替上古漢語的介音*r」、『平山久雄語言学論文集』(2005)所収、北京：商務印書館。

吉池：いずれにしても、①と②を満たす解釈として *kl* のような二重子音を認めざるをえないということですね。

中村：漢語の上古音に二重子音を認めたとして、その下限はいつかということが問題となります。

二重子音存在の下限

吉池：Jaxontov (1960:46) は、*-l* は後代に半母音もしくは母音 (*-e-*) となり、ついで主母音自体に変化をきたし、1 等韻と 2 等韻の押韻は不可となったとします。そのような状況の変化は、紀元前後、魚部の 2 等韻字が歌部に転入したことにあらわれるとします。ところで魚部の 2 等韻字が歌部に転入したとはどういうことでしょうか。

再晩一些時候，二等字的介音 *l* 被某個半元或者元音（可能是 *e*）取代，後者又反過來引起主要元音的變化。這變化發生在紀元初前後，那時某些二等字不再與相應的一等字押韻（例如魚部二等字轉入歌部）。（46 頁）

中村：音価については、2 等韻の声母に *-l* を加え、それ以外の部分は Karlgren 氏の *Grammata Serica Recensa* の上古音により提示すると次のようになります。漢代の頃には、魚部の家（2 等相当）などの *-l* が脱落して後続する主母音が変化し、歌部の加（2 等相当）などに合流したと想定するわけです。

	上古音	漢代	中古音
1 等 魚部	姑 <i>ko</i>	→	<i>kuo</i> 模韻 1 等
2 等 魚部	家 <i>klâ[klɔ]</i>	↘	→ <i>kâ[kɑ]</i> 歌韻 1 等
1 等 歌部	歌 <i>kâ[kɑ]</i>	→	
2 等 歌部	加 <i>kla[kla]</i>	→	→ <i>ka[kɑ]</i> 麻韻 2 等

もっとも Schuessler (2009) の音価によると次のようになります。なお、Schuessler 氏は *-l* ではなく *-r* としますが、この *-r* を *-l* に読み替えて考えましょう。

	上古音	漢代	中古音
1 等 魚部	姑 <i>kâ[kɑ]</i>	→	<i>kuo</i> 模韻 1 等
2 等 魚部	家 <i>krâ[kra]</i>	↘	→ <i>kâ[kɑ]</i> 歌韻 1 等
1 等 歌部	歌 <i>kâi[kai]</i>	→	
2 等 歌部	加 <i>krâi[krai]</i>	→	→ <i>ka</i> 麻韻 2 等

吉池：Karlgren 氏の音価によると、前漢と後漢の間頃までに、*-l* が脱落したことによって、後続の主母音の音価が変化し歌部の加と合流したと理解することができます。他方、Schuessler 氏の音価によると、魚部の姑が漢代に *[kɔ]* となり、家の主母音とは異なるという

前提のもと、歌部の加の韻尾-i が取れさえすれば家と加はともに[kra]となり合流することができます。そうすると、-r- (Jaxontov 氏の-l-) が脱落しなくとも問題はないということになってしまいます。

中村：Jaxontov 氏は Karlgren 氏の音価に近いものを想定して、魚部の一部（2 等の家など）と歌部の一部（2 等の加など）の合流をもって、-l-の脱落を想定したのでしょうか。

吉池：押韻の状況のみによって-l-の脱落の時期を想定するのは困難なようです。古屋昭弘氏が提唱するような時代別・地域別の諧声資料によるならば、あるいは-l-の脱落の下限を想定することができるようになるかもしれませんが、それは今後の課題ということにして今回はここまでにしましょう。